

〈2.「エッジの社会学—ソーシャル・ワイズの探究」研究会〉

## 2-3. 地方で活動する建築家のリアリティへ

——「グローバルな志向／ローカルな実践」が生み出すアポリアを生きる——

松村 淳

### 要旨

建築家という職能は「クリエイティブ」「華やか」といったイメージが先行し、その実態はあまり一般には知られていない。建築家の多くは一級建築士を取得している建築士なのであるが、自らを建築士とは名乗らず、建築家と自称する。しかし、建築家を名乗り設計事務所の運営を続けていくことの困難さは並大抵のことではない。本稿はある一人の、地方で活躍する建築家への聞き取りから地方の建築家のリアリティに迫ろうとする試みである。ここでいう地方とは大都市／地方都市という対比的な概念における「地方」である。それにくわえて、「グローバル／ローカル」という対比的な視点も導入する。建築家が「グローバル／ローカル」といったアンビバレントな志向を内包し、それらの乖離と矛盾を解消すべく苦闘している姿を、建築家T氏の語りからみていく。

### 1 はじめに

日本には建築士と呼ばれる人々が100万人以上存在している<sup>1</sup>。住居というものが「衣食住」という生の三本柱の一角を担うポジションにあるにも関わらず、住宅を建設したり購入したりする当事者以外の人々の関心は高くない。また、公的な国家資格は存在しないが、日本には欧米のような建築家（architect）も存在する。最近でこそ、『CASA BRUTUS<sup>2</sup>』などの雑誌を通して、知られるようになってきた建築家であるが、そこに登場する建築家の多くは大都市圏在住で、仕事に恵まれている者たちである。しかし建築家は都会にだけ存在する職能ではない。地方にも建築家は存在する。本稿の目的は、知られざる地方在住の建築家のリアリティの一端を描き出そうというものである。ここでいう「地方」とは何か、そしてなぜ「地方」に照準するのかという問いが想起されることは当然であろう。

ここでいう「地方」とは「大都市／地方都市」という対比における「地方」であり、具体的には人口が40万人程度の高松市を中心とした地方都市圏である。建築家にとって「地方」とはいかなる意味を持つのか。絶対的な人口の少なさや、経済規模の脆弱さなどの指標は、クライアントがあって成り立つ建築家という職業にとっては不利な条件である。しかし、T氏のようにいったん、進学で大都市に出たものの、再び帰郷する者も少なくない。建築家を生業とするには、明らかに「不利」と思われ

1 2011年現在、一級建築士の数は約34万人、二級建築士は約70万3千人である。

2 マガジンハウスが発行する月刊誌。住宅を中心にデザインなど幅広い記事が掲載されている。建築家が登場する事も多い。

る「地方」に帰るということは、たんに「故郷であるから」という理由以外に、何か別のインセンティブが働いているのだろうか。

さらに、「グローバル／ローカル」という対比的な概念セットにも照準する必要があるだろう。

日本における建築家という職能は、明治時代にイギリスよりもたらされた職能であり、またその団体である JIA 日本建築家協会が建築家という職能の国際標準化を目指していることから分かるように、グローバルを志向するものである<sup>3</sup>。

一方、本稿における「ローカル」とは、実際の設計業務とそれに付随する様々な事象を指す。「グローバル／ローカル」は「理念／実践」と言い換えることもできるだろう。

そして本稿に登場する T 氏は、そのようなグローバル志向の建築家の職能倫理を忠実に内面化している。しかし、彼の実践＝設計活動の舞台は「地方」であり、そこにはグローバル志向なクライアント<sup>4</sup>はきわめて稀にしか存在しない。彼はグローバルを志向しつつも、それを発揮できる場面は限られている。彼は仕事の実践の中で発生する齟齬や矛盾をどのようにして埋め合わせているのだろうか。また、彼は建築家を名乗りながらも、グローバルな志向＝建築家の倫理や高い職業意識を捨て、(あるいは最初から持たずに) 下請け業務や施工業などとの兼業をすることで生計を立てる者たち、つまりローカルな実践のみの世界に生きる建築家を批判する。しかし、彼らのような建築家と T 氏のような建築家の違いを明確に定義づける指標は存在しない。そのような中において、T 氏はどのようにして自らを卓越化、差別化しようとしているのだろうか。以下、これらの問いに対するこたえを T 氏の語りの中からみていくことにする<sup>5</sup>。

## 2 建築家とは誰か？

### 2.1 建築家 T 氏について

T 氏は香川県在住の建築家である。実家は農家である。現在も田畑を所有しており、農業も続けている。彼は大阪の大学を卒業後香川に戻り、いくつかの設計事務所で修業をした後、独立し建築設計事務所を開業した。彼の事務所は高松市の中心部にあるマンションの一室である。扉を開けると、すぐに打ち合わせコーナーがあり、そこにはブラウン管モニタを備えた旧式パソコンが置かれている。壁面は一面、本棚である。建築雑誌のバックナンバーでぎっしりと埋め尽くされている。ところどころに自作の建築模型が飾られている。

彼は JIA 日本建築家協会香川支部の中核メンバーの一人であり、設計業務以外にも、精力的に会の活動を行っている。はじめに、T 氏に大学時代から独立までの状況から聞いてみた。

- 
- 3 元来建築家という職能が生まれたのが欧米であり、欧米には長い歴史を持つ建築家の職能集団が存在する。イギリスには RIBA (Royal Institute of British Architects) 王立英国建築家協会という団体が、アメリカには AIA (American Institute of Architects) 米国建築家協会という団体がそれぞれ存在する。また建築家の世界組織として UIA (The International Union of Architects: 国際建築家連合) という団体もあり、その日本支部は日本建築家協会が担っている (JIA20年史編集会議 2007)。
  - 4 ここでいう「グローバル志向のクライアント」とは、建築家という職能をきっちりと理解した上で仕事を依頼し、建築家の要求通りの報酬を支払うクライアントのことを想定している。
  - 5 この聞き取りは、2011年9月6日午後1時～午後3時半にかけて行った。場所は T 建築設計事務所 (仮名) である。
  - 6 建築家の職能団体。約5000名の会員を持つ。

著者「在籍されていた大学での建築教育はどんな感じだったのですか？」。

T氏「大学では技術的なことは何にも教えてくれない。家でやって来いと。先生に言われたことは、言葉で言わずに「絵」にしてみろと。その力がないと建築家にはなれない。絵がうまくないと全然ダメ。僕は絵が好きなんや。数学もすき。だからぴったりの職業やね」。

著者「影響を受けた建築家は誰ですか」。

T氏「瀧光夫<sup>7</sup>、安藤忠雄<sup>8</sup>に影響を受けた」。

大学を卒業した後、どうして仕事の少ない香川に帰ろうと思ったのだろうか。率直な疑問をぶつけてみた。

著者「大阪の大学を出てなぜ地元に戻ってきたのですか」。

T氏「向こう（大阪）でやろうとも考えてた。大学卒業する時は（成績が）上位だったので、大学院出てないと紹介できないある設計事務所に紹介された。でも、そこではなく、坂倉<sup>9</sup>に入りたかったが、無理だった。（香川に帰ろうと考え始め）雑誌を全部みた。香川県の事務所が七件あった。山本忠治<sup>10</sup>の民俗資料館がいいので、（山本のもとへ）行きたいが、県庁にいかないかん。（公務員にならなければいけない。）それは無理だ。香川に帰るなら山本坦<sup>11</sup>がいいと。こちらに帰ってくるなら山本やと。山本は6回断られて、その後も通って15回目に試験をしてくれた。それでようやく入ることができた」。

著者「独立したばかりのころは、どんな風にして仕事を取っていたのですか」。

T氏「下請けで走るのではなく、営業で走り回った。でもノウハウがない。役所まわりしてみたりね、でも一番いいのがコンベに出すことかな。初年度はほとんど生活できなかった。借金だらけやったな。まあ、明日から食おうと思ったらどなんでも（いかようにも）できると思うけど、下請けになるしかないで。それは覚悟しなあかん。建築家からしたらかなり離れた世界になるわな。自分はこういう夢があって、こういう建物を作りたいと言うてた建築家志望が、いつのまにか下請けしとったら（生活が）楽になって、その生活に落ち着いてしまって、そのほうが安定してるからこれでいいか、工務店の施工図を書いているほうが楽やとか。そうなると一枚ナンボという世界になる。いつの間にか相手が評価するようになる。自分の評価を。建築家が、建物をこうしようというときは、こちらが評価する。自分はこういう価値があらうということを評価す

7 建築家（1936～）元大阪工業大学、福山大学教授。

8 建築家（1947～）安藤忠雄建築研究所代表 東京大学特別栄誉教授。

9 坂倉建築研究所のこと。坂倉建築研究所は日本を代表する建築家の一人である坂倉準三（1901～1969）によって1940年に設立された。

10 建築家（1923～1998）香川県で活躍した建築家。長く香川県庁に在籍。瀬戸内民俗資料館で日本建築学会賞を受賞。

11 建築家（生没年不明）香川県で活躍した建築家。

る。実力がなかったら向こうから評価される。ひどいときにはお前の図面は一枚なんぼやとね。独立当時に、本当に仕事がないときに、鉄工所に（仕事をもらいに）走った。仕事ありませんかと。あ、これ書いてくれ。と言われて一枚鉄骨の図面をかいた。すぐにその仕事はくれた。書いて持っていったら、『じゃあこれ』といって小切手で一万円くれた。当時は生活にいいよ（本当に）困っている時で、オレ図面にその小切手貼り付けて泣いたんや。もう、それからは絶対せんと。こんなみじめなんか。それまでは、前の会社で、ある程度『設計してる』って胸張って言ってたのに。こんな情けなくてみじめなこと、やってるなあって。それからはそういうことしない。それを押し殺したら、設計士としたらいけるけど、建築家は無理。そのうち、設計屋！って呼ばれるようになる。そういうひとがほとんどですよ。八割方そうなる。建築家協会でも四分の一か三分の一くらいは下請け中心が多いよ。どうしてもそうせんと安定しないから。一時期どぼとはめた（入会させたから）から、その時に入っている人が、ちょっと外れた道をいってるようなところがある」。

大学を卒業し、地元の有力な設計事務所を経て独立。ここまでは順風満帆だったT氏が「食べていく」ことの困難に直面したことを詳細に語ってくれた。下請けになれば、生活は安定する。しかし、建築家ではなくなる。T氏は、生活かプライドかという極限の二者択一の場面に何度も遭遇しながらも、常に困難な道＝建築家を選択し続けたのである。

## 2.2 建築家とは誰だ？

建築家自身は建築家について、どのように考えているのだろうか。一級建築士や二級建築士のような資格名は名乗りやすい。しかし、建築家は公的な資格が存在していない。そのような状態の中で、どのように建築家であり続けていくのか。建築家としての生存戦略が大いに気になるところだ。次に、T氏が考える建築家像について聞いてみた。

著者「建築家として日々心がけていることはなんですか」。

T氏「生活の生き様が出てくる。何も考えず仕事ばかりしている人は出てこないと思う。これまで勉強ばかりしてきた人はアートのセンスがないと思う。こんなこと言うたら怒られるけど。何かひねり出すというと優秀な人よりも変なことをやる人のほうが、おもしろい。結局いろんなことを経験しているほうが豊かなものができそうなんや」。

著者「建築家の方って服装に気を使う人が多いですよね」。

T氏「何年前に、熱海で建築家協会の集まりがあってね、そこで会長があいさつの席上開口一番『こんな恰好ですみません』と。スーツやで、スーツで何でこんな恰好ですみませんなんて言うんだろ。僕、びっくりした。僕と愛媛からきたヤツの二人だけがスーツだった。みんな「まっくろけ」や、服が、カラスの集団かと思うくらい。建築家は黒を着とったらいいんやと思ったわ。ある人と浴場いったら、その人パンツまで黒だったわ（笑）この時に、建築家ってネクタイせんのやあって気が付いた。だから、今はもうこんな恰好や。（ポロシャツにジーンズという出で立ち）遊び人みたいやろ？ネクタイもしよらん」。

著者「どうすれば建築家になれるのですか」。

T氏「独立する時に明日からでないとならダメなのか、10年先でもいいという違い。このスタンスは随分と違う。明日からしたいのなら下請けに入ってしまう。当時が一番早かったのはハウスメーカー。ハウスメーカーに入ったらすぐに仕事をくれる。でも下請けしてしまうと、ずーっとそればかりしてします。そのうち、それで安定してしまう。月々何件って入ってくるから、それがずーっと慣れてしまうと、さび付くんだ。そうではなくて、一日、一か月、一年待てるか。辛抱がどんだけできるかで差が出てくる」。

著者「建築家に向き不向きはありますか」。

T氏「向き不向きはあるね。頭のいい人も全然センスのない人もおるし、学校の時の成績がめちゃくちゃな（極端に悪い）人でもセンスがいい人もおる。だから、ある程度、一級建築士というレベルは、どうにかなるやろうけどそれを超えたところにすごく差が出てくる。香川にずっとおるかぎり（香川県内でしか仕事が出来ていないようでは）まだそんなに（建築家としての実力が）伸びて無いのだなと。僕の一年後輩が今月号の雑誌に載っていた。そいつのことをみるとああ、負けてるんだなと思う」。

筆者「建築家とはどのような人であると考えますか」。

T氏「むかし、建築家はどうかあるべきかと、ある建築家に教わったことがあるんや。それはホテルに行って職業の欄に建築家と書けるかどうか。設計士と書くか、自営業と書くか。それで建築家と書けないかん。まあ、自称ですよ。自分が建築家として意識した時に建築家と言う。自分が建築家という意識がないと、後ろめたい仕事<sup>12</sup>というか、下請けとか確認下したりという仕事を中心になってしまう。でも、世界レベルの建築家の基準、大学院卒に限る、とかにすると香川県で何人おるんだろうか？ということにもなってしまう」。

T氏が言うように、特に「地方」の建築家／建築士の多くは住宅メーカーの下請けや確認申請用の図面を描いて糊口をしのいでいるのが現状である。そのように住宅メーカーの下請けで糊口をしのぐ者を建築家と呼んでいいのだろうかというのがT氏の持論である。少なくとも日本建築家協会に公認されている建築家はそうであるべきではないという。

建築家を「その他一般建築士」から卓越化するための一番手っ取り早い方法は、建築家を名乗るための要件を厳しくすることだ。たとえば大学院卒にして修士や博士の学位を持っていることを条件にするなどが考えられるが、T氏も述べているように、そうすると香川県から該当者がほとんどいなくなってしまう。

次に地方における建築家の認知度、そして具体的な建築家像についてさらに聞いてみた。

12 建築基準法第六条の規定に基づき、一定以上の面積の建物や一定の用途の建物を建築しようとする場合、建築主は申請書により建築確認を受けて、確認済証の交付を受けなければ建築することができない。

### 2.3 やはり低い認知度

筆者「現在、日本における建築家の認知度はどうですか？また、建築家とはどのような人を指すのでしょうか」。

T氏「建築家は外国ではレベルが高い、でも日本ではすごい軽々しく扱われているよな。今、あの、ハウスメーカーの客引きの材料で、建築家の無料相談なんかやってるでしょ。建築家に無料で相談させる。(笑) ひどいよな。それよりもひどかったのが、建築家が語るとかなんとか言って、工務店のオヤジが『自分が建築家』いうてやっとなる。自称してる。建築家の自称は日本では許されてる。けど倫理的にどうかと思う。建築士の連中だったら、これ建てて後から繋げたらいい<sup>13</sup>とか、なんかね、やってはならない法を犯してしまうことがあるかもしれん。法律違反は絶対にやったらアカン。法律違反の手助け的なこともやったらいかん。次に独立性があるということ。それは専業の設計という業務を持って独立性がないとアカン。工務店をかたわらにやっとなる設計ではダメ。もうね。狂ってしまう。儲けようと思うのが第一になるから。三番目が芸術性。この芸術性というのが、どのレベルかというのが一番難しい。前の二つは一級建築士を持っていたらなんとかなるかもしれん。だけど、芸術性というのはだれが認めるんや？ということになる。その指標は国際コンペに何回出しているとか。その中で何回当選したのかという約束事がある。そういうのをやったらどうかという話になっている。でも、芸術性についてはある程度、みんなが認めたらいいやろうという話になっている。ただまあ、今の芸術性はある程度の人がみて、まあいいやろうという話になればいいと思う。これらの三つの指標が建築家の条件やね。ただし「自称」が多いね。あんたは建築家やと言うてくれる人がおったら、いいけど、なかなかおらんからね。言うてくれるんは、ハウスメーカーが無料相談の建築家として呼ばれるときくらいかもしれんね」。

著者「建築家の認知度は香川ではどうですか」。

T氏「無いね。建築やっとなるもん(者)に対する四通りの呼び名があるんや。設計屋、設計士、建築士、建築家の四通りくらいの呼び方。設計屋は工務店のおっさんが言うね。『おい、設計屋』とか一般の人は設計士が多いね。建築士という呼び方をする人は意外と少ない。あの建築家が…という呼び方をされることはほとんどない。無料相談をする人が建築家と言われるのかもしれないね。(笑) 本当言うたら、それらをきれいに分けないかんね。姉齒のおかげで、設計の人間がきちんとなしないとダメなんですよ、ということが見直されたね。構造なんかも特に、『構造家』という感じで名前が確立された。構造一級建築士<sup>15</sup>というはっきりとした資格ができたから。アートではなく構造のようなエンジニアの側面は確立しやすいね。わたしは建築家やという人がおる。確認申請しかしよらん、その人は建築家を自称しはじめたとたん、服装が黒で、髪をビシーッとな

13 違法になる恐れのある部分を施工せずに完了検査を終え、検査後に施工すること。

14 2005年に発覚した「耐震強度構造計算書偽装事件」を起こした元一級建築士。

15 平成20年11月28日に施行された新建築士法によって、構造設計一級建築士制度が創設された。一定規模以上の建築物の構造設計については、構造設計一級建築士が自ら設計を行うか若しくは構造設計一級建築士に構造関係規定への適合性の確認を受けることが義務付けられた。

でつけて、『これからは下請けなんかしません』。って言うたんや。でも食えないっていうんが分かった途端、『いや、もう私カメレオンやから何でもします』（笑）『いや、もう建築家は敷居が高いからもうしません』って（笑）自称で建築家はそういうことになるんや。でも、一般の人から建築家の誰それさん、よろしく願いますといわれて、わたしは建築家ではございませんなんていう人おらんと思う」。

著者「いま、Tさんはチームを作って活動されていますよね」。

T氏「team〇〇な。建築家としての意識が高い人を集めようと。その中で話し合おうと。あの五人は絶対に褒めあわない。けなすばかりや。でも、一緒にやるということはお互いを認めてる」。

T氏は、香川県における建築家の知名度を「無い」と即答した。建築家という職能が通用しないことを何度も体験してきたのであろう。その言葉には、開き直ったような渴いた怒りが滲んでいた。香川を含め、地方都市には大学や専門学校が少ない。とくに建築学科を有する理工系や芸術系の大学は大都市に集中している。香川県には建築学科を擁する大学が存在しないことも、建築家という存在が認知されにくい大きな原因の一つなのかもしれない。

またT氏は「建築家」の認知不足に加えて、「同業他者」によって「建築家」の名称が安易に濫用されることに危惧を抱いている。そのような者たちへの批判＝斥力が高まるほど、志向性を同じくする仲間を繋留していく引力が増加する。T氏は「意識の高い」建築家五人でチームを作り、展覧会や建築相談会などを開催するなど精力的に活動している。

### 3 建築家の仕事とは—それは「普通の」建築士とは何が違うのか

#### 3.1 月見台のある家—一家に物語を埋め込む

建築家と名乗るには相当の覚悟と自信が必要だということが分かった。しかし、覚悟と自信だけでは、建築は建たない。建築家T氏はどのようなやりかたで、建築を設計しているのだろうか。そこで最近竣工したある住宅について聞いてみることにした。その住宅には「月見台」がある。中秋の名月が鑑賞できるような位置に丸いガラス窓が開けられているのだ。何故、どういういきさつでそのような住宅が生まれたのだろうか。

T氏「これ何かわかる？」。

著者「月齢表ですか？」。

T氏「そう月齢表」。

T氏「その土地を見て、その土地のエネルギー—というか大事なところを見つけ出すことが設計なんですよ。この家は非常に、田舎の土地なだけけど、西には山があって僕は地図を見たときに「こ

の山イケル」と思ったんや。裏鬼門<sup>16</sup>の方角にこの山があるな。表はここや。線を結んだらちょうどここや！見つけた。でも残念ながら見えなかった。じゃあ、これは使えない。で、東を見たときに、山がこうあって、そこからたぶん、月が出るやろ。これを見つかるか、見つけないかが設計なんや。これを見つけてあげたら設計は半分以上済んでいるんやな。その仕事が僕の仕事なんや。建築家と僕が言うとなは（自称している根拠は）、そういうところを出せるかどうか。施主にこういうことをしますよ、というたら、ものすごく共感してくれた。この土地のこの場所にしかないね。ってね。丁度、目の高さに丸窓がくるようにしてるんや。1.5メートルの高さ。お客さんが来た時に、「あ、ここから月が見える」なんてことになる。物語ができる。それが建物の値打ちや。それから後は、お客さんがどのように使うかを定める。座って月見するもよし、子供の遊び場にするもよし。僕は月見台を作ったけど、そこから使うのはお客さんの自身だから。その提案が何もなくて、どうでもしてというのなら、ハウスメーカーと一緒にやから。建物があって、南に窓があってというのはモデルハウスに行くと、確かに気持ちがいいんだけど、実際に立ってみると（敷地によっては）そうならんしね。5パーセントが建築家の仕事。95パーセントは施主の仕事と施主の価値観。ここ、高速道路のすぐ近くやろ。高速道路が上を走ってその下に道があって、その道に挟まれとるやろ。普通だったらいやだと思う。でも、家作ってみて、家の中に車をすっと通してやろう。なんかそういうのが、そこで感じるものが、そこで何かを表現してあげるのがその人のためやね」。

T氏は建築を作ると同時に物語を作っているのである。それこそが建築家が設計する建物の値打ちだと述べる。住人を収容するだけの機能を確保した「ハコ」ではなく、そこで起こる「コト」を想像しながら、建物を設計していく。ゆえに、「月見台」のような意外な仕掛けが現れたりするのである。しかし、このような設計方法は比較的長い時間を要するので「数」をこなすことが出来ない。結果、費やした時間の割には儲からないという事にもなる。

### 3.2 天文台のある家一時には割に合わなくても引き受ける

建築家のもとには、「こんな家に住みたい」という夢にあふれたクライアントがやってくるが、彼らが潤沢な資金を持っているとは限らない。むしろ、「ギリギリ」の状態をやってくることのほうが多いくらいだ。仕事の難易度は高いが予算は少ない。このような矛盾をどのように解消していくのかが、建築家が発揮すべき手腕であったりする。

T氏「ある日、こんな仕事の依頼が来たんや。奥行き2.5メートル、手前の幅が5メートル、奥の幅が10メートルの家。幅2.5メートルやで！それで予算が1000万円。そこに車3台入れてくれと。手紙が来て、「あなたでなければできない、とにかくあなたでないとだめ」と。じゃあ、やってみましょうということになった。でも、やっぱり、いくらなんでも1000万では無理なんで、もう少しだしてくれませんかと頼んだ。そしたら「星を見るのが好きなんで天文台が欲しい」。と言われた。1000万円で、厳しいっていう話なのに、まだそんな難しいことを言うのかと。望遠鏡はオーストラリアから60万円取り寄せるので、それを設置してくださいって言われて。最終的には1400

16 鬼門（北東）に対して反対の位置（南西）を指し、建築家や建物を依頼する施主の中にも、鬼門や裏鬼門の位置にこだわりを持つ者が少なくない。

万円まで出してくれた。「設計料、めっちゃ高いよ」って念を押したけど、それでもやってくれと言われて。手紙来て、「あんたしかおらん」と（依頼主が）言うからやろか。ここまで惚れられたらやろかとなった。やるとなると、ぱぱとやって、（施主に図面を）出せば割が合うよな。でも、この人がそんだけ思いがあって、必死で頼んできてるんだから、こちらも心中するつもりでやってやろうかと。建物は6層にして、メゾネット式<sup>17</sup>にして平面トラス<sup>18</sup>を組んだ。建物そのものが天文台になったらいいなと。9か月かかって、建物も複雑になって、大変な図面やった。アシスタントの子がもう書き方がわからん言うて、根を上げた。そんな図面書いて、もらったお金は知れてるからね。あれは割に合わなかったと思うけどね。でも、出来上がった時にお母さんが涙流して、『ありがとうございます』と感謝されたんで。もう、それでよかったなあ。もうちょっと高い設計料だったらなあと思わないでもないけどね。

## 4 ライバルへの思い

### 4.1 ハウスメーカーに対する思い

建築家 T 氏にとって、住宅の設計を巡って競合する相手は少なくない。建築家、建築士、工務店、そしてハウスメーカーなどがあげられる。地方においても、ハウスメーカーの存在感は増すばかりである。そのような現状を T 氏はどのような思いで見つめているのだろうか。

著者「それにしてもどうして皆さん、建築家にあまり依頼をしないのでしょうか？」。

T 氏「世間の人には設計を知らないから、ハウスメーカーにまず行くっていうでしょ。ユーザーの方がどういう人に頼むのかわからん。ハウスメーカーに行くのではなく、いい建築家、いい大工さんに頼めばいいものができるよというのが一つの走りだって（ようやく理解され始めた頃であって）、それをやりだしてからもう10年くらい。それから分かれていって、そのうち、ハウスメーカーが建築家を持っています。ということになってきた。いつのまにか商品のように使われ始めている。建築家という名前の付いたのがうちの会社におるよと」。

著者「住宅メーカーではインテリア・コーディネーターが住宅デザインのイニシアチブをとっているという話を最近聞いたのですが、そのあたりの動きについて何か思うことはありますか？」。

T 氏「先日、僕インテリア・コーディネーターの人と話したことがあって、実はインテリア・コーディネーターがコーディネートして建築家を呼んで、『自分がコーディネートして全部私が決めるんや』という話をしていた。『そうなければいいよね』と彼女は言っていたのだが、けど、建築家を使うってちょっと違うんちゃう？使うのではなく一緒に協働してやるのがいいのではと。そういう態度でないと、どっちが上や下やということになる。そうではなく、一緒に協力するような感

17 一つの住戸が二層以上から成り立っており、部屋の内側にある階段で上下移動する。二階建てとは異なる。

18 三角形を単位とした構造骨組みで、屋根や橋梁などに頻繁に使われる。平面トラスとは、平面の中で部材同士の釣り合いを確定させ、それを板のように組み合わせることによって、立体的なトラス構造とする。

じでないといいものはできない。なんかね、ビフォーアフターなんか、出てる人って、なんかこうぱっと派手でしょ？あれなんか、インテリア・コーディネーターの間では評判がいいけど、建築家の間ではウケが悪いよね」。

著者「ハウスメーカーに対して思うことは何かありますか？」。

T氏「契約書をきっちり交わさないと、確認を下さないと（ようにしてくれ）そういうふうにしませんかという動きをしている。契約をきちんとしましょうというのは姉齒以来のことなんだけど、もっときちんと認知されんと正直厳しいかなと。ハウスメーカーさんの営業とか契約の取り方なんかを見よったら、車を買うのか、野菜を買うような感覚で家売るのほこらえてくれよ（勘弁してくれよ）。と思う。安いよ、いいよって。あれをみよたら（様子を見ていたら）わかるんだけど、今は太陽熱、ちょっと前は井戸、その前は外断熱。その時の、世相、世相を表しとる。いま、設計料まで込みですというのは今、建築家がこわいんですよ。いま、（設計料）込みです、にしておかないと、いくらとられるのか不安な施主の心理を逆手に取ってる。2000万円の横についてるのが設計料。しかし、今度は込みにして、今までは設計料無料ですよというたい文句だったん。工務店もそういう言い方をしよる」。

T氏は建築家という名称が住宅メーカーの中に取り込まれてしまって、商品の訴求効果をあげるためのブランディングの一つとして使われている現状を嘆く。しかし、住宅メーカーにとっては、住宅は売るための商品である。そこでは、ブランド価値を高めることが出来そうなものはすべて取りこんでいくというマーケティングの力学が働いているのである。

#### 4.2 他の建築家への思い

毎週日曜日にテレビ朝日系列で放映されている「大改造劇的ビフォーアフター」という番組がある<sup>19</sup>。間取りや構造に問題を抱える家を、「匠」と呼ばれる建築家／建築士が「劇的」に改造するというリフォーム番組である。この番組は建築家や建築士の職能の一端を紹介する機能は担っていると見えよう。しかし、「匠」自らが施工をしたり、家具を作ったりするシーンも少なくないため、建築家や建築士の仕事に対する誤解も与える結果となっている。この番組について意見を聞こうと思っていた矢先、T氏のほうから切り出してきた。

T氏「なんかな、あの、アホな番組あるでしょ？ビフォーアフターか。香川から三人出たんよ。彼らの中にビフォーアフターに出たって（前面に）押し出して営業しよるんおるわ。『ビフォーアフター出ました』ってこれ恰好わるいで。こんなん出る人建築家協会から外そうで（笑）。だいたい、天井自分でぶち抜いたりしてる時点で施工やっとなるもん。そんなんやるなよ。まあ「匠」という名前でしょうからいいけど。彼らは建築家ではないっての。僕の娘の友達で、ビフォーアフターに出ている「匠」になりたいから建築を勉強するために東工大に行くっていうとる子がおるんや。建築やるのはいいけど、「匠」になるのは間違ってるぞ。一級建築士になるために東工大

19 2002年から2012年1月現在まで放映中である。

に行くんちゃうぞ。建築家になるために東工大に行くのならいいけど。それに比べて渡邊篤史の番組は<sup>20</sup>悪くないね。施主が建築家って呼んでるのがいいね。建物もしっかりしとるし。ひどい話、僕のところに雨どいが壊れたから来てくれて電話がかかってきたことがある。僕らが行ったら荷物を運んだり（雑用も）してくれるもんやと思われかねんよ。これは番組制作上のことで、一般の建築家はこんなことしませんって、はっきり謳ってほしいんやけどね」。

T氏はこの人気番組に出た建築家を舌鋒鋭く批判していた。それは、この番組が「匠」という職能を新たに作り出すことによって、クライアントがただでさえ混乱しがちな建築業界を余計に混乱させる「アホ」な番組であるにもかかわらず、格好の宣伝の場と捉えた建築家が喜び勇んで出演していたからだ。私利私欲に走って、「建築家界」全体の利益に反するようなことをしているとT氏は見なし、非難しているのだ。このような「意識の低い」建築家たちと自分が同一視されることを危惧するT氏は以下のように、行政によって「公的なランク分け」がなされることを望んでいるようである。

T氏「設計事務所でも、僕は四つくらいに分けよる（分類している）けど、アトリエ系、まあ僕はそっちに行こうとしてるけど、組織系、下請け系、その他と。こんな風に分類わけしてもいいかと。役所は分類しようとしてると思う。役所が調査に来て、『おたくは元請ですか？下請けですか？』って聞いてくる。彼らはどういう仕事をしているか分かっているみたい。それを一般ユーザーにもわかるようにしようと思ってるんちゃうか。役所は一年に一回の報告事項をちゃんと守らさないとアカンと思う。それ以外（きちんと定期報告ができない事務所）は除外すると。個人情報保護法とか関係ないやろ、この場合は。もっとこの事務所はこんなことやってるって公にすればいい。僕がちょっと、ある設計事務所のホームページをみたらウソばかり書いてる。それも僕らの足を引っ張ってる。それだったら、ある程度役所のほうである程度ランク分けしてくれてもいいと思う。今は全部一緒になってしまってる。「匠」まで一緒になってる。「匠」はその他やろ、いや、その他どころか番外か（笑）。僕らは、そない（それほど）裕福じゃないけど、ちゃんとやっている自負はある。ある構造屋さんに言われたんだけど、設計事務所なんかなくてもいいんだと。工務店の中に入っておればいいんだと。それはちょっとねえと思う」。

## 5 なぜ建築家は儲からないのか？

「建築家は儲からない」。「金儲けが目的なら違う仕事を選択しろ」。建築家を志していた私自身がよく言われた言葉である。何故建築家は儲からないのか。先述したとおり、ハウスメーカーの台頭によってますますパイが小さくなっていることは否めない。しかし、それだけではない。建築家の収入源は建物を設計することによって得る設計料である。この設計料というものが「クセモノ」でなかなか「正当」な金額を貰えないのだ。T氏に設計料について聞いてみた。

著者「設計料はどれくらいですか？」。

20 テレビ朝日系列で放送中の『渡辺篤史の建もの探訪』のこと。

T氏「僕はだいたい一割から提示する。一割って言えるようになったのは10年くらい前から。それまでは、よう言わなかったな。その頃は7、8パーセント。でも、びくびくしながら。でもここは割り切らないかんといい気持ち。自分に自信がないのと、それだけ言うて、断られないかという。お金の面で値切ってくるのなら断ろうと。実際、二か月まえに一件断った。契約しよう、となって値切ってきたからね。設計を値切ることがどういうことかわかってない。じゃあ他でやってくださいと。そのかわり、こちらはプランをきちんと書いて、提示したよ。そこまでのお金は回収したけどね。サムライ（士）の仕事っていうのは、一時間なんぼってほしい知ってる。でも、司法書士さんとか土地家屋調査士とかでも、（相談する時は）「士」がついたら、お金がいるって思っておかないとかんと思っただけど、知らん人が多い。建築士もほんとはそうなん。今はいいよ（このインタビューにかんして）。プランを練るとい時間医者の所行って、問診だけで、注射も打ってもらってないから、ってなにも払わずに帰りますか？と。だからハウスメーカーさんが設計料が中に入っているというのは困るんだけどな」。

著者「設計料ってモノではないので、理解してもらおうが大変なんですね」。

T氏「設計料を値切るような客はすぐに切るべきやな。大工さんがプランを考えるんだと思っただと言われたりする。建築士は確認申請を出すだけの仕事、まあ代書屋のようなもんだと思われていた。信頼関係がないまま現場に入ると、最悪やで。施主はつねに金をとられているような感じになっとるけん」。

著者「設計料も含めて、工事の単価もどんどん下がってきていますよね」。

T氏「今、建築家協会が入札反対の運動をしよる。エンジニアの人なら入札はいいと思う。でも企画とかアイデアの面がつよい設計は入札はやめてほしい。それなら弁護士もせえや、医者もせえや、入札をと思。まず、確認申請を出す前に設計契約をきちんと結ぼうと。これを法律化することが出来れば、いいと思う。僕もこれまでエラそうなこと言ってきた、今下請けしてくれませんか？って頼まれたら、今の状態やったら断る自信がないな。専業でもって独立しないとあかん。単独でない。先日、イタリアの建築家を呼んで設計をしてもらおうとした人がいるけど、設計料いくらだと思？同額！総工費と同額やで」。

著者「それはすごい話ですね」。

T氏『3000万の建物に300万取るんか、ワシの年収やが（自分の年収と同額程度ではないか）』。っていう人がおる。そりゃ、何かしてもらわないかんと。施主も、300万あったら「流し」（シンク）のええの（立派なもの）が買えるとかね。例えば、薬局行って薬を買って良く利くのが3万円だって、そのお金があったらお菓子や雑貨がよーさん（沢山）買えるわ、なんて思うかな？だからちょっとね。物の価値、設計の価値っていうのが確立されないんや。ようやく国交省のほうで設

計料の、あの基準がでたんよ<sup>21</sup>。これが報酬の法律みたいなもん。でも、裁判になったらこの国交省の基準の設計料が認められないんよ。いざ裁判になったら通用しない。それは国交省で言われているでしょ？って言うてもだめ。じゃあ、どういう計算をするんですか？って言ったら『あなたの年収から換算して適切な料金を出せ』と。いや、それひどいなとおもうけど。結局はそういう風になってしまう。法律でせっかく決まっているのに、法律で裁かれるときにはそれが全然違うもんになってしまうとかね。そこもおかしい。なんやー？って話でしょ。こらえてくれよと」。

T氏の言うように、地方における「理想の設計料」は一割である。総工費3000万円の住宅に対して300万円という設計料である。これくらいだと年に数件をこなせば十分に生活が成り立つ。しかし、長引く不況と、何よりも設計料に対する認知不足もあり、一割の設計料を取れる建築家は少ないのが現状である。しかも、設計料を取らない（価格に含まれているのだが）ハウスメーカーの方式が一般的になりつつある現在、設計事務所がとる「設計料」という名の料金は施主にとって余分な金として受け取られる場合もあるのだ。

## 6 まとめ

### 6.1 「グローバル／ローカル」の乖離が発生させる磁場

「地方」において、「建築家」を続けていくことのリアリティと困難をT氏の語りからみてきた。

「建築家」にとって「地方」とは何か。今回の聞き取りに限って言えば、当初設定した「大都市／地方都市」という対比における建築家の実像については、あまり多くを聞き出すことが出来なかった。高松市は中核都市であるとはいえ、その人口は40万人を少し超える程度である。人口の絶対的な少なさ、潜在的なクライアントの絶対数の少なさを意味する。受注生産である住宅の設計において、人口の少なさは大きなハンディであるはずだからだ。

その影響の一端は、T氏が語ってくれた節々からも垣間見ることができるが、今回の聞き取りに限って言えば、「地方（都市）」という語彙に基づいた直接的な語りとして聞かれることはなかった。

むしろ、聞き取りから浮かび上がってきたのは、彼の語りにもあったように、「建築家」の倫理規定を徹底して内面化することで、生活を犠牲にしても「建築家である自分」を守ろうとしていることだった。この「建築家」であることのリアリティと実践上の困難は、「大都市／地方都市」という比較軸よりも、「グローバル／ローカル」という視座からみることでよりその輪郭が浮かび上がってくる。

彼が遵守している「建築家」の倫理規定は国際標準に準拠したものであり、ゆえに彼はグローバルな職能倫理を体現し、グローバルな志向性を有して仕事をしている。しかしながら、クライアントた

21 平成21年に出された「国土交通省告示第15条」のこと。建築家／建築士が受け取る設計報酬は国土交通省が出している告示によって計算方法が定められている。平成21年にそれまで参照されてきた告示1206号が廃止され、第15が新たに公布された。その中身は以下になっている。しかし、告示に明記されている通りの計算方法で算出された報酬を受け取ることは困難であるという現実がある。

- ① 建築物の類型が4類型から15類型へ詳細化された。
- ② 標準業務量について、総合、構造、設備の専門分野別に表示された。（別表第1～第15）
- ③ 標準業務量について、工事費ベースから床面積（㎡）ベース表示に変わった。
- ④ 標準業務量について、人・日から人・時間へ単位が変更された。社団法人日本建築士連合会のHPを参照（<http://www.kenchikushikai.or.jp/kanrenseido/gyomu-hoshukitei.html>）。

ちはT氏がグローバルな職能倫理を体得した「建築家」とあるという事を知らない。それは、T氏の「建築家は外国ではレベルが高い、でも日本ではすごく軽々しく扱われている」といった語りや「香川県で国際標準の建築家を認定しようとしたら該当者がいなくなる」という語りからも分かるように、グローバル志向の建築家という職能と、自分自身のローカルな実践としての建築設計活動の実態とが、大きく乖離してしまっている現状がある。

故に、彼が「建築家」足らんとするためには、下請け業務や施工業務などとの兼業をすることで生計を立てる建築家たち、つまりローカルな実践の世界にのみ生きる者たちや、住宅のブランディングを高め、クライアントに対する訴求効果の高いワードとして人口に膾炙し始めた意味での「建築家」という名称を都合よく使う者たちから自らを卓越化／差別化することに「駆られ」てしまわざるを得ない。

T氏が「建築家に相応しくない」番組に出た建築家に対して「こんな人出る人建築家協会から外そうで」と述べているように、それはときとして、「同業他者」に対する斥力として作用する。そして、彼が「(建築に対して)意識の高い」建築家仲間五人でチームを結成し独自に活動を行っている事例からも明らかなように、斥力は、同じ志向性を持った者を繋留する引力として反転する。

このように「建築家」という職能の中に内在する「グローバル／ローカル」という大きな乖離は斥力／引力という力が作用した磁場を発生させ、「地方」の建築業界を再編し続けている。

## 6.2 今も続く承認のための闘争

日本における建築家の歴史は、そこに名を残す有名建築家の華々しい活躍や華麗な作品群の陰に隠れてしまっているが、その職能の承認をめぐる闘争の歴史でもあった。戦前から建築家たちはその職能を国家に承認させるための法律の制定を目指して、1920年から1940年まで12回にのぼる建築士法（今でいう建築家法）の建議案を提出した。しかしそれは認められず、1950年になって建築基準法と建築士法が定められたが、それは彼らの望んだ法律とはかけ離れたものだった。結局いまだに建築家＝architectという職能は国家によって承認されるに至っておらず、一方で「建築家」の実像が社会的に知られることもなく、「建築家像」だけが氾濫し、住宅消費のために動員されている状況にある。

T氏の語りから垣間見られるのは、そうした状況の中で「建築家」であり、かつ「地方」で活動をする上では、国際基準という「グローバル」なものへの志向を抱きつつも、「ローカル」に実践を行わなければならないというアポリアを生きる（生きなければならない）、という現実である。実際に、T氏の聞き取りからも、建築家協会の活動を通じて、建築家の活動の広報と知名度の向上のために、建築家協会の活動に精力的に参加したり、建築家としての職能を発揮することを第一義とするため、ときに「割に合わない」仕事も引き受けたりしている実態が明らかになった。

T氏は「地方」にありながら、日々のローカルな実践の中で、100年近い建築家の承認闘争の延長線上にある活動を（誰に頼まれるでもなく）展開しているのである。

こうした、乖離と矛盾を解消すべく苦闘する実践は、どのように考えればよいのだろうか。たとえば、筆者のフィールドワークからは、「地方」は人口の絶対数こそ少ないが、地縁や血縁を生かしたクライアントの確保が大都市よりも容易なのではないかという仮説が想起される。クライアントの確保の仕方と地縁血縁ネットワークとの関連に関する問いは次回以降の聞き取りにおいて問うつもりである。加えて、大都市部で活動する建築家への聞き取りも実施し、比較調査をすることで、「地方」の現実を逆照射する方法もあるだろう。今後の課題としたい。

【参考文献】

国土交通省住宅局建築指導課建築技術研究会編、2008、『基本 建築基準関係法令集2008年度版』建築資料研究社。  
JIA20年史編集会議編、2007、『建築家って』日刊建設通信新聞社。